2018年
8月1日
第82号
編集・発行
厚木市農業委員会

あつぎ 農委だより

中央花壇を作製する厚木市鉢物部会

緑のまつりが5月12、13日に厚木中央公園で開催され、5万6千人が来場しました。

市を彩る花は、JAあつぎ夢未市などで購入することができます。

光ヶ丘幼稚園児たちによるパレード

主な内容

2面 農業はICTでもっとおいしく

農業の現場に最先端の技術を取り入れた市内の農家に注目です。

3面 生産者がみえる6次化の魅力

生産者が生産･加工から販売までを行う6次化に取り組む農家が増えています。

4面 こどもと遊べる農業特集

これからの季節、お子さまと楽しめる農業体験が市内にはたくさんあります。

農業委員編集手記

（農政副担当理事　三橋　澄夫）

小紙は、農業委員と農地利用最適化推進委員が地域の話題を持ち寄り、全員で紙面の編集を行っています。

年2回、各4ページの発行と情報量に限りがあるなかで、将来にわたって農業を継続していくために、「市民はどんな情報を求めているか」、「熱心に農業に取り組む人たちを紹介したい」など、さまざまな意見を交わしながら紙面を作っています。

今年、「農業委員会だより」全国コンクールで全国農業新聞特別賞をいただいたことを励みとし、さらに紙面の充実に努めていきたいと考えています。

編集・発行／厚木市農業委員会　〒243-8511 神奈川県厚木市中町３-17-17　☎046-225-2480 FAX046-223-9530　今号から和暦表記を西暦表記に変更します。

農業はICTでもっとおいしく

4月。下津古久にある内海いちご園は、たくさんの来園者でにぎわっていました。

近年、市のイチゴ狩りは、需要の高まりをみせており、一部では、入園に制限がかかるほどになっています。

こうした中、来園者においしいイチゴを味わってもらいたいという思いから、2017年にJAあつぎいちごICT研究会（内海則行会長）が発足しました。

市内初 産地パワーアップ事業活用

同研究会は、ICTの高度化などによるイチゴの高品質多生産を目指し、国の産地パワーアップ事業の活用に乗り出しました。

この事業を活用することにより、地面から高い位置でイチゴを栽培し、立ち姿勢での作業や収穫を楽しめる高設栽培システムを導入したハウスの建築、施設整備が始まります。

内海則行会長

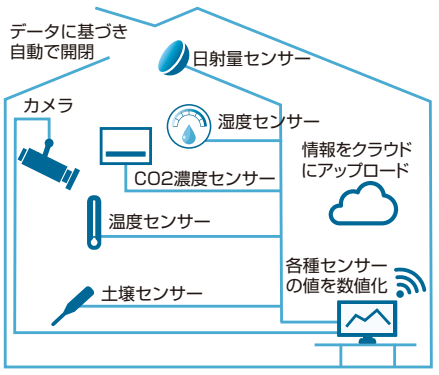
高設栽培により、収穫体験や農作業が楽な姿勢で可能に

にぎわう内海いちご園

さらに、施設内の温度・湿度、日射量やCO2濃度をコンピュータで管理し、生産を行うICTの導入も可能となります。ハウス内の状況をスマートフォンやタブレット端末を利用して確認できるほか、品質のいいイチゴを作る農家の情報を共有し、研究することで、会員全体の技術向上につながることが期待されています。

いち早くICTを導入した内海会長は、「品質のいいイチゴを作る農家のデータの中に改善のヒントがあるはずだ。それを見つけ、さらにおいしいイチゴを作りたい。」と言います。

相川地区では、毎年1月頃からイチゴ狩りを楽しむことができます。最先端の技術を活用して作られたイチゴに期待が膨らみます。



新たなハウスの一例

あゆコロちゃんにきいてみよう！

Q ICTってなぁに？

A インフォメーション・アンド・コミュニケーション・テクノロジー（情報通信技術）の略称で、これまでのIT（インフォメーション・テクノロジー）よりも、情報が通信により伝達することを重視した言葉なんだ。

Q 産地パワーアップ事業ってなぁに？

A 競争力を強化するために、地域が持つ強みを生かして、産地としての高収益化に向けた取り組みを支援する事業のことだよ。

厚木市では、JAあつぎいちごICT研究会が最初の認定を受けたんだ。

推進委員の活動記録

推進委員発足から2年 着々と成果

農地等の利用の最適化の推進のため、2016年に委嘱された農地利用最適化推進委員は、担当する各地区の農地パトロールを実施しています。

この活動により、無断で転用されてしまった農地を早期に発見し、是正指導を行い、農地に復元させたり、遊休農地の所有者に戸別訪問をし、解消に結びつけたりと成果をだしています。

さらに、こうした各地区の成果や問題点を共有し、それぞれの業務に活かすため、月に一度、意見交換会を開催しています。

依知地区の甘利推進委員、楠推進委員が座長を務めた5月の意見交換会では、「後継者の育成」がテーマにあがり、「地区で小規模営農グループ作りを推進してはどうか」、「農機具のシェアリングを提案し、農業が続けられる体制作りをしてはどうか」など、活発な意見が交わされ、市の農業が抱える問題への認識を新たにしました。

「後継者の育成」や「遊休農地所有者へのアプローチの仕方」などについて意見交換をしています

農地パトロール強化月間

今年は、8月と9月を農地パトロール強化月間とし、市内全域の農地を調査します。

この調査の結果を基に、農地の適正な利用や担い手への農地利用の集積・集約化の推進に活かしていきますので、ご理解、ご協力をいただくとともに、農地や農業に関するご相談がありましたら、お気軽に声をお掛けください。

農地パトロールの様子

農業を継ぐ

近年、農業従事者の高齢化が深刻となっています。国が実施した2017年の「農業構造動態調査」では、農業就業人口の平均年齢は66・7歳となっています。この高齢化の要因の一つと言われているのが後継者不足です。

こうした状況の中、結婚を機に、20歳という若さで「飯原ミルクファーム」を継ぐ決意をした飯原和葵さん（30歳）を紹介します。

現在、約50頭の牛を飼育しています

後継者だからできること

飯原ミルクファームは、愛名で搾乳業を営んでおり、和葵さんはその3代目に当たります。

就農後、飼料の高騰などによる、厳しい経営状況を目の当たりにした和葵さんは、後継者として、牧草の自給化を提案します。

現在、約50アールの畑で栽培が可能となりましたが、和葵さんは、「始めたばかりで結果はまだ分からない。労働力とのバランスを見ていく必要がある。」と課題を指摘しています。

さらに、「規模の拡大を目指しつつ、レストランなど消費者と直接関われることをしたい。」と目標を語ってくれました。

これからの若き後継者の活躍が楽しみです。

NEW FARMER 新規就農者の紹介

2016年に就農した鳶尾4丁目にお住いの井上芳文さん（37歳）にお話を伺いました。

Q 就農までの経過は？

前職はシステムエンジニアをしていましたが、自分の努力と工夫次第で、生産から販売までできる農業に魅力を感じ、かながわ農業アカデミーで、1年間農業の勉強をして就農しました。

Q 苦労していることは？

農場のインフラがなかなか整わないことや経費が予想以上に掛かり、収益が伸びないことです。しかし、今年3月に結婚した妻が、一緒に農作業をしてくれるようになったことを励みにがんばります。

Q 力を入れていることは？

今年は、県内では一番多いと思われる2万株のホワイトコーンを植えました。8月上旬に収穫し、夢未市などに出荷しますので、ぜひ味わっていただきたいです。

また、2年後を目標に上荻野でブルーベリー摘み取り園を開設したいと思っており、その準備をしています。

こうした私たちの情報を「ワイルドふぁーむ」というホームページで掲載していますので、ぜひご覧ください。

井上夫妻の後ろには、ホワイトコーン畑が広がります

生産者がみえる 6次化の魅力

6次産業化とは、農畜産物の生産者が、食品加工と流通、販売にも取り組むことです。市では、栽培した農畜産物を加工して、夢未市や自らが経営する直売所などで販売する農家が増えてきています。

たかざわふぁ～む直売所

高澤和雄さん（69歳）は、ナシやカキなどの果樹を中心に愛甲で農業を営んでいます。

この農地に隣接するたかざわふぁ～む直売所は、奥さまの美代子さん（68歳）が経営しており、その農地で採れた農産物を使用したジャムや梅干しなどを販売しています。また、直売所には、ミニカフェが併設されており、自家製野菜をたっぷり使用したカレーや自家栽培のナシを使ったジュースなどを楽しむことができます。東京都や山梨県などの遠方から訪れる人もおり、1日100人近いお客さまが訪れることもあるそうです。

消費者により近く

美代子さんは、「初めは、本当にお客さまが来てくれるのかという不安はありましたが、果樹園を訪れるお客さまや地域の方が一休みできる場所を作りたいという思いで、オープンしました。」と当時を振り返ります。

来店者の方は、「近くで新鮮な果物や無添加のジャムなどを買える場所があるのはとてもうれしい。」、「お店の隣で実際に栽培しているところが見えるので安心。」とお店の魅力を語ります。

生産者の顔が見えるのが6次化の魅力の一つです。生産者と消費者が近い厚木市らしい農業のあり方ですね。

その日収穫した農産物を加工（2次産業）

農産物は全て自家製（1次産業）

直売所で販売（3次産業）

たかざわふぁ～む（愛甲3002番地）

夢未Kids スクール開校

JAあつぎは、小学校高学年の児童を対象とした通年型食農教育事業「夢未Kids（キッズ）スクール」を開催しています。

第2回を迎えた今回のカリキュラムでは、温水にある専用体験農園「ゆめみ水田」で、30人を超える小学生が、JAあつぎ青壮年部員と一緒に、田植え作業を体験しました。参加した児童の一人は、「この格好は大変だけど、田んぼの水が気持ちいい。」と笑顔で語ってくれました。

この日植えたお米は、10月に児童たちによって収穫され、11月23、24日に開催される農業まつりで販売される他、餅つき大会に使用する予定です。

スクールでは、この他にも、夢未市を活動の拠点として、自分たちで栽培した作物を使った調理実習など、さまざまな体験を楽しみながら、年間を通して食と農について学びます。

【問い合わせ先】
JAあつぎ指導販売部
☎221局2273

イネは手作業で植えました

あゆコロちゃんにきいてみよう！

特定生産緑地制度のご案内

Q 生産緑地ってなぁに？

A 農林漁業と調和した良好な生活環境の確保を目的に、都市計画で定められている市街化区域内の農地のことだよ。

Q 特定生産緑地ってなぁに？

A 多くの生産緑地が、2022年に都市計画決定から30年を迎えて、いつでも買取り申出が可能になるから、都市農地の減少が懸念されているんだ。そこで都市農地を保全するために作られた制度なんだよ。

1992年　都市計画決定

※1993年以降に決定された生産緑地もあります。

↓

特定生産緑地の指定受付
30年経過前

特定生産緑地に指定する

- ◆30年経過後も引き続き、10年間、生産緑地を農地として管理することが義務付けられます。
- ◆指定後10年間は、主たる農業従事者が死亡した場合等を除き、買取り申出はできません。
- ◆固定資産税は、引き続き農地課税となります。
- ◆次の相続においても相続税の納税猶予の適用を受けることができます。
- ◆10年ごとに指定を更新することができます。
- ◆農地としての管理が不十分な場合などには、指定されません。

特定生産緑地に指定しない

- ◆30年経過後は、いつでも買取り申出が可能となり、市が買い取らない場合は、土地利用の制限が解除されます。
- ◆固定資産税は、農地課税から宅地並課税へと5年間にわたって、段階的に税額が上昇します。
- ◆次の相続では、相続税の納税猶予の適用を受けることができません。

今後、特定生産緑地の指定受付を開始しましたら、生産緑地の所有者の皆さまに、ご案内の通知をいたします。

【問い合わせ先】
都市計画課　☎225局2401

全国農業新聞
NATIONAL AGRICULTURAL NEWS
毎週金曜日発行
月700円（送料込）
お申し込みは農業委員会事務局へ

あつぎ農委だよりが、第24回「農業委員会だより」全国コンクールで全国農業新聞特別賞を受賞しました。

賞状を受け取る木原農政担当理事（右）

知らないと損する

国が支える　安心が大きくなる
担い手積立年金

詳しくは…　農業者年金基金　検索

お手続きは、JAあつぎ本所、各支所または、農業委員会事務局へ

1 農業に従事されている方は誰でも加入できます
60歳未満の国民年金第1号被保険者（国民年金保険料納付免除者を除く。）であって年間60日以上農業に従事している方は誰でも加入できます。配偶者や後継者など家族農業従事者の方も加入できます。
家族一人ひとりの年金を！ 今、女性の新規加入者が増えています

2 保険料は自分で選べ、いつでも見直しできます
自分が必要とする年金額の目標に向けて、保険料を自由に決められ（月額2万～6万7千円の間で千円単位）、経営の状況や老後設計に応じていつでも見直せます。

3 税制面で大きな優遇措置があります
●支払った保険料は、全額が社会保険料控除の対象となり、所得税・住民税が節税になります（支払った保険料の15%～30%程度が節税）。
●農業者年金基金が保険料を運用して得られる収益（保険料の運用益）は非課税です。
●将来受け取る農業者年金には、公的年金等控除が適用されます。
（65歳以上の方は公的年金等の合計額が120万円までの場合は、全額控除できます。）
つまり入口から出口まで税制上の優遇措置があります

特集 あつぎにはこどもと遊べる農業がある！

あつぎ＋農業＋こども

農地で育てる地域のきずな

当日は約30人が参加

子どもたちが真剣な表情で土を掘り起こし、手渡されたサツマイモの苗を一つ一つ、丁寧に植えています。それを見守るのは、保護者やコミュニティづくり推進委員など、さまざまな年齢の方たちです。

よく晴れた5月、依知北公民館では、ふれあいある地域づくりのため、農業体験を実施しました。

参加した子どもたちは、山際に住む農家の方から、「ここは風が強く吹くから、風下に葉を向けると苗が根づきやすい」とアドバイスを受け、慎重な手つきで、作業に励んでいました。

農作物と地域の絆が同時に育まれる農業体験は、今後も各地区の公民館で実施されます。

詳しくは、地区の公民館だよりなどをご覧ください。

あつぎこどもの森公園

6月30日開催のジャガイモ収穫体験には、25人の親子が参加しました

8月18日(SAT) ソバの種まき体験

秋 サツマイモ収穫体験

あつぎこどもの森公園では、さまざまな体験イベントやプロジェクトが開催されており、厚木の農業の恵みを体験することができます。

イベントの詳細及び参加手続きは、あつぎこどもの森公園ホームページから。

自然のなかで親子ふれあい

ざあざあと雨が降りしきる6月、七沢自然ふれあいセンターは、雨の音にも負けない、子どもたちの元気な声でいっぱいでした。

この日は、七沢の畑で収穫したジャガイモとタマネギを使用したカレー作りで18組、51人の親子が参加しました。

当初予定していた野菜の収穫体験は、雨のため中止となりましたが、その分、子どもたちは、一生懸命に調理を行っていました。中でも、薪割りは初めての子が多く、ご両親の手を借り、悪戦苦闘しながら行っていました。

11月18日 サツマイモ 12月9日 ダイコン 収穫＆調理体験

調理後は、その日出会ったばかりの親子が、みんなで作ったカレーを一緒に食べ、旬の味を楽しみながら会話を弾ませていました。

センターのイベントは、市内に在住、在学または在勤の親子はどなたでも応募できますので、ぜひ自然の中でのふれあいを体験してみてください。

【問い合わせ先】七沢自然ふれあいセンター ☎248局3500

かながわブランド INあつぎ

県内生産の優位性を保つため、一定の品質を確保している農畜産物が登録されており、市では、10種類の農畜産物が登録されています。（8月現在）

厚木トマト
ほどよい酸味と甘みの強さが特徴です。

あつぎの梨
環境保全型農業で安全にも気を付けています。

厚木のぶどう
樹上での色づきと鮮度にこだわっています。

これから旬を迎えるナシとブドウは、8月下旬から9月上旬にかけて、市内でもぎとりができます。

地元で味わえる採れたてのかながわブランド。そのおいしさを体験してみてはいかがでしょうか。

「あつぎ農委だより」では、自主財源確保のため、広告掲載事業を実施しています。広告掲載の申し込みは㈱横浜メディアアド（☎045-450-1804）へ